

個人差の心理学的説明と観察のパースペクティブ

渡 邊 芳 之*

抄 録：観察された個人差を説明するときには、心的概念による内的説明と状況要因による外的説明のいずれかを選択するが、その選択は観察の状況的・時間的パースペクティブに大きく影響される。パースペクティブが狭い場合、多くの観察されない／しない状況要因が無視されるので、内的説明が選択されやすい。観察のパースペクティブが状況的・時間的に広い場合には、考慮される状況要因が増えるため、外的説明の可能性が大きくなる。こうした知見が心理学的説明やアセスメントの問題に対してもつ含意についても考察した。

キーワード：心理学的説明、観察、心的概念

I. 問 題

人の行動やその個人差に関する心理学的説明の方向性には、心的概念など行為者の内的要因によって説明しようとする内的説明と、その行動をとりまく状況や環境といった文脈要因から説明しようとする外的説明のふたつがある。私はこれまでパーソナリティ概念に代表される心的概念による説明がもつ性質や、その問題点について考察してきた^{1) 2)}。しかし、実際の行動説明に内的説明が用いられるか、外的説明が用いられるかがどのように決定されるかについては、まだ考察していなかった。今回はそのことについて考える。

行動のあらゆる説明は、行動とそれが生じる文脈についての観察に基づいて行なわれる。そして、観察者がそこからどのような質の情報を、どれだけの量得ることができるか、得ようとするかによって、内的説明と外的説明のどちらが選択されるかが決定されると考えられる。

とくに、行動がその人独自のものであったり、行動に個人差がはっきりと見出されるような場合、得られる(得ようとする)情報の量と質が内的説明と外的説明との選択に与える影響はとくに大きくなる。そして、こうした情報の量と質は、観察者が行動の観察において用いる状況的パースペクティブと時間的パースペクティブの双方と密接に関連している。結論を先にいえば、そうしたパースペクティブが狭ければ狭いほど内的説明が選択されやすく、パースペクティブが広ければ広いほど外的説明が選択されやすい。

心理学において内的説明を重視するか、外的説明を重視するかは、一般には研究者の人間観、世界観などの「深遠なもの」を反映すると考えられがちである。しかし、実際の説明が行なわれる場面では、そうした思想的なことではなく、観察のパースペクティブをどのようにとり、どのような質と量の情報をもとに説明を行なうかという、いくぶん「手続き的」なことの違いが、内的説明と外的説明の選択を決定していることが多いのである。

この論文では、観察のパースペクティブの違いと、その結果得られる情報の質と量の違いが、どのように内的説明と外的説明の選択を規定しているかを、個人差についての観察と説明の実例に基づいて考察してみたい。その後で、内的説明と外的説明のこうした相違が、それぞれが当該行動の心理学的説明や予測に対して持つ有効性や有用性にどのように影響するかについても考察する。

II. 観察のパースペクティブと説明の選択

次のような場面を想像してほしい。

あなたは就職試験を受けに、ある会社を訪問する。まず筆記試験を受けたが、試験監督をしていた「サトウ」という名札の社員はあまり感じがよくなく、試験についての質問などにも親切に答えてくれなかった。

その後あなたは面接試験を受ける。面接室にはさきほどのサトウも含む4人の面接者がいて、面接者がひとりずつ質問をして、あなたはその質問に答えた。4人の面接者のうちの3人はあなたに対して好意的なようで、質問もわりと答えやすい

*医療福祉学科基礎臨床心理学講座

ものが多かったが、サトウだけはそうでなかった。サトウはあきらかにあなたに対して好意的でなく、質問も難問や答えにくいものが多く、あなたの回答内容に対しても、否定的だったり難癖をつけたりした。

数日後に知らされた結果は案の定不合格で、その後サトウにも、他の面接者にも二度と会うことはなかった。

さて、サトウがあなたに対して「意地悪」だったのはどうしてだろうか。サトウの行動にはどのような説明が可能だろうか。可能な説明の種類は、誰が、どのような質と量の情報をもとに説明を行なうかによって大きく違ってくる。

1. 情報が限られているときの説明

まず、あなたがサトウの行動を説明する場合を考えてみよう。あなたがサトウの行動について持っている情報は、あなたが彼を観察した就職試験のいくつかの場面での、ごく短い時間に得られたものに限られる。その間サトウは他の人に比べて特に意地悪で、かつその意地悪さはあなたが観察できた2つの場面と、その間の時間の経過を通じて一貫していた。あなたから見て、サトウが意地悪でない場面や瞬間はなかった。これらの情報から直接的にひきだせる説明は「サトウは意地悪な人だ」とか「サトウは意地悪な性格である」という内的説明だけである。このとき、「意地悪」という言葉は心的概念として機能している。

ただし、あなたが自分が直接観察できた情報以外の要因までパースペクティブを広げることができれば、別の説明も可能になる。まず、就職試験の場面の中にサトウを意地悪にさせる状況要因があったのではないかと考える。たとえば、あなたの態度や言動にサトウを怒らせるものがあつた、あるいは就職試験に参加した社員の中にサトウと対立している者がいて、それが気にいらなかった、または、この会社は最初からあなたを採用するつもりはなく、サトウはあなたが合格しないようにわざと困らせる役回りだった、などなど。こうしたことを想像すると、サトウの行動を彼の内的要因ではなく状況要因によって説明できる可能性が生じる。

このように状況的パースペクティブを広げるだけでなく、時間的パースペクティブを広げることもできる。たとえば、サトウは試験の前の日の会議で左遷が決まっていた、とてもいい気分が試験に参加などしていらなかった、あるいは、前にやった就職試験でとても嫌な受験生に接していて、試験自体に対して好感を持っていなかった、などなど。この場合にも状況要因による説明の

可能性が生じるだろう。

このように、観察からの情報が限られているときには、個人に特有の行動は心的概念などの内的要因によって説明されやすいが、得られた情報以外の「観察されなかった状況要因」に状況的・時間的パースペクティブを広げることができれば、外的説明の可能性が生じる。もちろん、この場合の広げられたパースペクティブは想像力の産物に過ぎないので、そのままでは根拠に欠ける。しかし、追加的な情報を集めること（サトウにもう一度会う、会社の人に事情を聞く、など）ができれば、どの説明が正しいかを確認することができるかもしれない。

つまり、自分の目の前にある情報だけで「思考停止」とすると内的説明になりやすく、想像力を働かせてパースペクティブを広げ、新しい情報を収集していけば、外的説明が選択される可能性が相対的に大きくなるのである。

2. 情報が多いときの説明

いっぽう、サトウの行動を説明するのがあなたではなく、会社の同僚で試験にも同席していたホリタである場合には、どうだろうか。ホリタはこの会社に半年前に入社したばかりでサトウとのつきあいは短い、試験当日に試験開始前からサトウといっしょにおり、試験の終了後にもサトウと酒を飲んでいるとする。そして、ホリタから見ても試験中のサトウの行動は意地悪だったとする。

あなたとホリタの違いは、ホリタはサトウの行動についてあなたが観察できなかった時間や場面についても情報を持っているということである。そこでは、サトウの行動についての説明の可能性はより広がりを持つ。

もしホリタから見ても、サトウが採用試験以外の場面でもおおよそ一貫して意地悪であるならば、ホリタもサトウの意地悪を内的な要因から説明するだろう。サトウが試験開始前にも、試験後の飲み会でも意地悪であるなら、試験の場面の状況要因（あなたの受験態度など）が彼を意地悪にした可能性は低まるし、試験日以外の会社での行動も意地悪であるなら、試験当日の状況要因の影響は考えにくい。まして、ホリタがサトウと知りあった半年前から、ずっと意地悪な行動を繰り返していることを観察しているなら、ますます状況要因の影響は仮定しにくくなる。こうした場合、試験当日のサトウの行動はサトウの「意地悪な性格」などの内的要因によって説明されるし、その説明はあなたが同じ説明をした場合よりも（考慮した情報の量が多いという点で）妥当性が高いだろう。

しかし、ホリタから見てもサトウの意地悪に一貫性が見られないときには、情報の多さはむしろ外的説明が採用される可能性を高める。まず、試験開始前や終了後の飲

み会など試験以外の場面ではサトウの意地悪が観察されなかったなら、意地悪の原因は偶然か（魔がさした、など）、あるいは試験場面の状況要因（あなたの試験態度など）によって説明されるだろう。また、試験以外の場面でも意地悪が観察されても、それより前の日や、それ以降の日には意地悪が観察されないなら、サトウの意地悪は試験当日の状況要因（嫌いな社員といっしょだった、その日は体調が悪かった、など）によって説明されるだろう。もしサトウがある程度長い期間にわたってどんな場面でも意地悪であったとしても、以前はそうではなかった、あるいはしばらくしたらそうではなくなったとしたら、その意地悪はその期間サトウに影響していた状況要因（配置転換の時期で自分の地位に不安があった、など）によって説明されるだろう。外的説明が採用されないのは、先に述べたようにホリタの観察のパースペクティブ全体を通じてサトウの意地悪が一貫していたときだけなのである。

3. 情報をもっと多いときの説明

サトウについてもっと広い観察パースペクティブと情報量を持つ人が彼の行動を説明する場合には、内的説明が採用される可能性はより小さくなる。たとえば、サトウと結婚して15年になる彼の妻が同じ会社に勤めていて、入社試験にも参加していたとする。

もし、彼女がサトウの意地悪な行動を内的に説明するとするなら、サトウの意地悪が試験の場面だけでなく、試験の日のその他の場面、試験以外の日の会社でのさまざまな場面でも観察されるというホリタの場合の条件に加えて、家庭での行動とか、夫婦でどこかにいるときの行動など、会社以外の場面でも、意地悪な行動がある程度一貫して観察されることが必要になる。

もしホリタの内的説明の条件がすべて満たされ、会社にいる場面全体を通じて意地悪が一貫していても、妻が内的説明を採用するとは限らない。会社ではいくら意地悪でも、家庭など、会社以外で妻が観察可能な場面で意地悪な行動が見られないなら、サトウの意地悪は会社に限られたことであり、会社という状況そのものがサトウを意地悪にさせる状況要因を備えていると考えられるし、会社以外にもサトウが意地悪になる場面が他にあり、そうでない場面もまたいくつかあるなら、彼の意地悪が外的要因によって説明できる可能性は残るのである。

このように、観察のパースペクティブが広がって情報量が増えた場合、観察された行動を内的要因によって説明するためには、広いパースペクティブの全体を通じてその行動が一貫して観察される必要があり、内的説明が採用されるための条件はパースペクティブが広がれば広

がるほど厳しくなる。反対に外的説明が採用される可能性は、パースペクティブが広がるほど大きくなることはいうまでもない。また、もし与えられたパースペクティブ全体に渡って一貫した行動が見られたとしても、観察できない、あるいは観察されない状況要因への想像力を働かせ、追加的な情報を探索してパースペクティブをより広げるならば、内的な説明が採用される可能性はますます小さくなるのである。

4. 基本的帰属錯誤

しかし、われわれが実際におこなっている行動説明を調べると、人々が内的説明を採用する傾向はこれまで述べたような条件から予測されるよりもずっと大きい。とくに、われわれには自分の行動よりも他者の行動を内的要因から説明しやすい傾向があるといわれており、こうした傾向は「基本的帰属錯誤」とよばれる。

この錯誤がなぜ起きるかはよくわかっていないが、われわれが他者の行動を観察する状況の多くは非常に限定されていることや、実際には他の状況要因についての情報がアクセス可能であるにも関わらず、目の前で生じて観察されている行動にとらわれ、それだけで思考停止してしまうことなどが関係しているだろう³¹。

いずれにしても、観察のパースペクティブが広がって情報の質が変わり、量が増えるにしたがって内的説明の採用が減り、外的説明が有力になるという基本的な仕組みに変わりはない。

Ⅲ. 心理学的説明の問題

このような、観察のパースペクティブの違いによる情報の質と量の変化が内的説明と外的説明の選択に及ぼす影響は、いままで述べてきたような日常的な行動やその個人差の説明と同様に、個人差についての心理学的な観察と説明においても、基本的には同じ形で生じていると考えられる。

1. 観察の状況的・時間的限定性

われわれ心理学者も、人間行動とそれが生じる文脈についての観察から行動の個人差についての情報を得て、それらの情報から個人差についての説明を行なう。われわれが行動の個人差として注目するのは、ある状況で特定の個人だけが示す行動で、かつそれが観察の時間的・状況的パースペクティブを通じてその人に一貫している場合である。そして、行動と文脈について得られている情報をもとに、見出された個人差（の原因）が心理学的に説明される。

われわれは個人特有の行動、行動の個人差を検出するために、行動観察や面接、実験やアセスメントといった

多くの技法を持っており、それらの結果からそれぞれの個人に特有の行動傾向を見つけ出すことができる。しかし注意しなければならないのは、こうした技法がわれわれにもたらす情報は、すべて状況的、時間的に限られたパースペクティブしか持っていない、ということである。

たとえば、われわれが特定の個人の行動を一生にわたって追跡し、そこにあるすべての情報を観察記録するなどということはあるにない。どんなに念入りな観察であっても、ある特定の時間の幅の中で、ある特定の場面においてのその人の行動と、それをとりまく文脈についての情報しかもたらさないのであって、観察が行なわれなかった時間や状況に関わる情報は無い。1時間観察するか10年間観察するかとか、学校だけで観察するか家と学校と塾で観察するかとかいったことは程度問題に過ぎないだろう。また、観察できた時間と状況においても、そこでの行動やそれをとりまく文脈についての情報のうち、われわれが観察記録できるものはごく一部である。面接やアセスメントでも問題はまったく同じで、むしろ技法としての縛りが大きい分、行動観察よりも狭い状況的、時間的パースペクティブの情報しか得られなくなる⁴⁾。

2. 観察のパースペクティブと説明の選択

このような、われわれが得ている情報の状況的・時間的限定性をとくに考慮しないで、現に見えているもの、手に入っている情報だけをもとにして個人差を説明するとき、もっとも採用されやすいのは内的説明である。クラスの子どもたちを一日観察したら、ワタル君は一日中騒がしく、ミユキさんはどの授業でも静かだった、という観察情報だけから可能な個人差の説明は「ワタル君は自己顕示欲求が強い」とか「ミユキさんはおとなしい性格だ」などの内的説明だけだろう。

しかし、観察のパースペクティブを状況方向へ広げていくと、外的説明の可能性が生じる。その日、家にいるとき、塾など学校以外の場所にいるときのワタル君の行動はどうだったか。それらの場所でも彼が相変わらず騒がしかったら、内的説明の可能性は相対的に高まるが、もしそうでないなら、ワタル君の学校での騒がしさは、学校の場面に存在して、先の観察の時点ではわれわれが観察できなかった何らかの状況要因による可能性が高まる。学校でのワタル君と彼をとりまく文脈をもう少し観察して、そうした状況要因を探す。

観察のパースペクティブを時間方向へ広げていっても同じである。ミユキさんは今日は確かにおとなしかったが、他の日はどうか。3ヶ月前はどうだったか、去年のクラスではどうだったか。一貫しておとなしかった、という情報が得られれば内的説明の可能性が高まる。しかし、もしそうでなければ、先の観察が行なわれた日に特

有のなんらかの状況要因が彼女をおとなしくさせていた、2ヶ月前に仲のよかった友だちが転校してしまった、などの外的要因による説明が求められるのである。

このように、心理学的説明においても観察のパースペクティブが状況方向、時間方向に広がるに連れて、内的説明を行なうための条件は厳しく（結果として満たされにくく）なり、外的説明の可能性が相対的に大きくなる。このとき、観察を行なった心理学者が、とりあえずの観察から得られた情報だけで思考停止して内的説明を選んでしまうのか、その観察では得られなかった情報へ想像力を働かせて観察のパースペクティブを広げ、新たな情報を得て外的説明を選ぼうとするのかという、心理学者の観察と説明への「姿勢」のようなものが、説明の選択に大きく影響してくる。

3. 観察の志向性と説明の選択

観察のパースペクティブを状況的・時間的に最大限に広げて、できるかぎり外的要因から行動の個人差を説明しようとする姿勢は、おそらく行動主義的な心理学者にもっとも多く見られるであろう。彼らにとっては、ある場面で行動に現われる個人差は、一見同じに見える状況にいても、人によって異なった強化随伴性が存在すること、あるいは、強化随伴性は他者と共有されていても、過去の強化歴の違いによってその場の弁別刺激や強化子の意味に個人差が生じることなどによって生じるものである。したがって、行動の個人差はその場の、あるいは過去の状況要因によって規定されるものであるから、個人差の説明とはそうした外的要因の発見にほかならない。

こうした姿勢は行動主義者が強化随伴性の原理に基づいて事象を見ようとするからだ、と思想的背景から説明することもできるかもしれないが、むしろ、内的説明を退け観察のパースペクティブをできるだけ広げようとする姿勢で行動の観察と説明に立ち向かったことが、強化随伴性の原理の発見とか、行動主義の思想の構築につながったのだと考えたほうがよいのかもしれない（卵が先か鶏が先かのような話ではあるが）。

いっぽう、限定されたパースペクティブからの内的説明でよしとする姿勢は、性格心理学など、心的概念による個人差の記述と説明を志向する「正統的」な心理学者によくみられるものである。彼らは行動の個人差の原因を、比較的限られた観察情報をもとに、さまざまなパーソナリティ概念や、「欲求」とか「モチベーション」、最近では「認知傾向」などといった心的概念を用いて説明することを好む。

こうした傾向は、パースペクティブ拡張の指向性を持たず、行動主義的な思考方法を嫌う彼らの「状況要因へ

の鈍感さ」に起因しているともいえるが、それよりも、彼らが共有している「個人差は内的要因によって定まる」という「思想」に起因していると考えたほうがよいだろう。彼らは、行動の個人差はすべからず心的あるいは生理的な内的要因の個人差の顕現型だと長年信じてきたので、限られた観察から個人差を内的に説明することに躊躇しない。そうした傾向は、心理学的アセスメントの論理によく現われている。

4. 心理学的アセスメントの問題

心理学的アセスメントとは、なんらかの手続きにもとづいて人の行動や反応を収集し、そこにあらわれる個人の特徴や個人差を、標準化されたやり方で表示するものである。多くの場合、アセスメントの結果はなんらかの心的概念と結びつけられ、それと関連する行動の説明や予測に用いられる。たとえば「外向性尺度」のようなものは、質問への回答などからその人の「外向性」を測定し、その結果からその人の「外向的行動」を説明したり（いわく、このテストによると彼は外向性が高い。彼が人付き合いがよいのはそのせいだろう）、予測したり（いわく、外向性が高いのだから、パーティーには出るだろう）する。

いままでこの論文で論じて来たことから考えると、これはあまりにも粗っぽい手続きである。あらゆるアセスメントもまた、限定された状況的・時間的パースペクティブの中で人の行動を観察しているに過ぎない。質問への回答とか曖昧な図版の解釈などの言語行動、足し算のスピードなどの作業行動などの標準化された観察から、それぞれの手続きによって個人差を叩き出しているのである。

そして、アセスメントにおける観察は非常に限られた状況で、非常に限られた時間の中で行なわれている。実際、ほとんどのアセスメントはどこかの「明るくて清潔な部屋」など、特定の状況だけで完結するし、時間的にも3時間以上かかるものなどまれだろう。そして、アセスメントの結果から得られる情報は、「アセスメント場面での被験者の反応はこれこれで、それは他者と比べてこれこれだった」ということだけで、アセスメント場面の状況要因とか、アセスメント以外の場面でのその人の行動などについての情報はまったく含まれていない。こんな限られた情報だけから個人差の内的説明をしたり、関連する行動の予測を行なうことがどうしてできるのか。それは、アセスメントによって測られる個人差が内的な「パーソナリティ」の個人差を反映している、という前提が存在していたからである。

伝統的なパーソナリティ理論では、行動にあらわれる個人差やそれらがおりなす個性は、人の内部にある心的

実体としての「パーソナリティ」が主な原因で生じると考える。したがって、さまざまな場面で観察される行動の個人差はそのまま内的パーソナリティの指標であると考えられ、パーソナリティ概念によって内的に説明される。同時に、内的パーソナリティは状況を越えた一貫性を持って行動に影響していると考えられるから、いずれかの時間と状況において行動の個人差を把握すれば、その結果から他の時間や状況における個人差を説明したり、予測したりすることができるようになる⁵⁾。

このような理論的先入見に基づけば、アセスメントが測定する個人差は内的要因によって説明されるとア prioriに決まっているのだから、観察のパースペクティブが狭いことや、その結果観察されない状況要因が広範囲に存在することは特に問題にならない。この場合、先に述べた行動主義者の場合とはまったく反対に、心理学者の理論的、方法的姿勢が狭いパースペクティブの観察情報から内的説明を行なうことを促進しているのである。

もちろん、こうした姿勢は正しくない。60年代後半からの「一貫性論争」の結果は、内的要因としてのパーソナリティ概念の有用性を厳しく限定するとともに、観察された個人差の原因として状況要因などの外的要因をより重視することを求めた。そして、アセスメント結果は限定された条件での行動観察の結果に過ぎず、それが行動の説明や予測に対して持つ力も状況要因に依存すると考えられるようになってきている⁶⁾。

アセスメント結果は確かにある限定された時間的、状況的パースペクティブの中で、個人の行動が示す個人差を客観的に把握することには役立つ。しかしそうした個人差の成立にはアセスメントによっては把握できない、観察されない状況要因の影響を無視することはできない。したがって、アセスメント結果が行動の説明や予測に役立つ程度は、パースペクティブを広げてそうした状況要因を分析に組込まなければ判断できない。アセスメントは人の行動を検査者の勝手な都合によって時間的状況的に切り取っているのであり、そこで得られた情報だけから個人差を内的に説明してしまうことは、先に述べた「基本的帰属錯誤」によく似た誤謬であり、先入観に基づいた思考停止にすぎないのである。

5. 説明の選択と予測・制御のパースペクティブ

これまで述べてきたように、内的説明と外的説明のどちらを選択するかは、観察のパースペクティブが時間方向、状況方向にどれだけ展開するかによって大きく影響される。そして、観察のパースペクティブが広がるほど、外的説明が採用される可能性が高まる。おもしろいことに、パースペクティブと説明との関係ではこの逆も成立

する。つまり、なんらかの個人差について外的説明を行なうと、その結果として心理学者のパースペクティブが拡張されるのである。このことは、個人差の説明に基づいた行動の予測や制御という場面で、もっとも顕著である。

ある個人差について内的説明を行なった場合、その説明が内包する情報は観察のパースペクティブ以上には広がらず、極論すれば「観察の時点でこうであった」ということだけである。だから、この説明から観察外の状況における行動や観察外の時間における行動を予測することは、「観察した状況ではこうだったから、ほかの状況でもこうだろう」とか、「観察した時にはこうだったから、ほかの時でもこうだろう」という推測を行なうことだといえる。内的説明が正しく、観察された個人差が実際に通状況的・経時的な一貫性を持っていれば、この説明は一定の予測力を持つ。しかし、多くの内的説明は観察のパースペクティブの限定性から生じるにすぎないから、限られた観察から得られた内的説明の予測力は、そこで観察されなかった状況要因が、観察状況と予測状況、観察時点と予測時点のそれぞれにおいてどれだけ類似しているかなどの文脈に影響される。ところが内的説明はそうした文脈についての情報を含まないで、その予測力は実際には偶然に依存してしまう。

予測以上に、行動の制御という点では内的説明のパースペクティブの狭さは致命的である。その内的説明が正しいにせよ、限定された観察の産物であるにせよ、その原因が内的であると説明するのなら、個人差のある行動の制御はその原因となる内的要因の制御によってもたらされる。しかし、内的要因をどうやって制御するのか。とくに心的概念のような実体のないものは制御のしようがない。個人差の内的説明は、その行動を制御する術を与えないのである。

このように、個人差の内的説明を行なった場合には、そこから心理学者が行動の予測や制御を期待できるパースペクティブはひどく狭い、限定されたものになる。いっぽう、外的説明が選択された場合には、予測や制御が期待されるパースペクティブは状況的にも時間的にもずっと広いものになる。

外的説明による予測は、内的説明によるもののように「現にこれこれだったから、ほかでもきっとこうなる」という無条件一方的期待型の予測ではなく、「観察された場面ではこれこれの状況要因が個人差のある行動を生み出していた。したがって、時間的、状況的に異なる他の場面でも、同じ状況要因が存在すれば、同様の個人差のある行動が生じる可能性が高い」という、条件限定型の予測となる。したがって、個人差の原因と思われる状況要因の検出が可能である限り、予測が期待できるパー

スペクティブは時間方向にも、状況方向にも無限に広がる。

このことは制御の場合より顕著になる。外的説明を行なった場合、行動の個人差を引き起こす、除去する、修正するなどの制御は、その原因となる環境や状況などの外的要因を変化させることで可能になる。内的要因と違って環境・状況要因はごく特殊な社会的環境などを除いては客観的に観察可能だし、物理的にアクセス可能である。したがって、その個人差の原因と思われる外的要因を制御できる限り、状況的にも時間的にもどれだけパースペクティブが広がっても、制御の可能性は保証されるのである。

このように、内的説明と外的説明との選択が観察のパースペクティブの違いから生じると同時に、どちらの説明を選ぶかが心理学者が未知の状況や未来に対してもちうるパースペクティブに影響するという事実は非常に重要である。

VI. 討 論

これまでの考察で、個人差についての観察が持つ状況的・時間的パースペクティブは、それが狭く、観察されない状況要因が多くなるほど個人差の内的説明に結びつきやすく、それが広く、多くの状況要因が観察の枠内に入ってくるほど外的説明に結びつきやすいことがわかった。同時に、心理学者が内的説明を選択することは、未知の状況やまだ見ぬ未来に対する心理学者のパースペクティブを狭くさせるのに対して、外的説明を選択することはそうしたパースペクティブを拡張させることも明らかになった。

こうしたことから、これまで心理学が日常的に行なってきた「限られた観察から抽出された個人差を内的要因から説明する」という手続きがどんなに乱暴で、問題の多いことであつたかがわかる。われわれが実際に観察できる情報のパースペクティブは狭く、観察できない／観察されない状況要因が人の行動やその個人差に影響しているのに、われわれがそれに気づかないことが非常に多いことは明らかである。しかし、内的説明はそうした問題について思考停止し、意識的にしろ無意識的にしろ、観察されない要因を行為者の中に放り込んで「欲求」とか「パーソナリティ」、「ころ」などの心的概念にその原因を帰属してしまう。

行為者の立場からすれば、自分はいろんな事情があつて、いまたまたまこういう行動をしているに過ぎないのに、その場面だけを勝手に観察されて、そのうえ行動の原因をすべて性格や欲求などといった自分の内部の要因のせいになされてしまい、あまつさえ別の状況や時間での自分の行動もそうした内的要因から説明されてしまうと

したら、とても我慢できることではない。自分にこれまででどんなことがあったか、今日だってどういう事情でこんなことをしているのか、ちゃんと理解してほしいと求めるのは当然だろう。

しかし、心理学者は自分たちだけの「理論」や、アセスメントなどの一見権威のありそうな「お道具」を隠れ蓑にして、状況と時間を勝手に切り刻んだ結果だけから人間を決めつけるという無理を押しつけてきた。それをせずに人間を見て、行動を説明しようと努力してきたのは、行動主義的な志向を持つ心理学者だけだが、そうした勢力が多数になることはこれまでなかった。これは、心理学者が内的説明を通じて行なってきたことが、一般人が情報が限られているときに行なう内的説明と基本的に同じ論理であり、一般人に理解されやすく、受け入れられやすかったことにもよるだろう。

しかし、学者が自分の研究対象とする事象に対して素人と同じパースペクティブしか持てないとしたら、その専門性とはいったいなんなのか。心理学者の使命は一般人よりも観察のパースペクティブを広げ、一般人にはアクセスできない要因にどんどんアクセスして、行動やその個人差の原因について素人よりもより厳密で、合理的な説明を手に入れることではないのか。そのためには、目の前にある情報だけで思考停止して安易に内的説明を選んでしまうような素人的な発想ではなく、自分に見えないいろいろな要因に対して常に想像力を働かせ、できる限りの情報を収集していくべきだろう。

もちろん、パースペクティブを広げればなんでもよいというわけではない。想像力によって広げられたパースペクティブはかならず客観的な情報によって検証されなければならないし、状況方向と時間方向へのパースペクティブの広がり、ある程度のバランスを保っている必要がある。最近はやりの「アダルト・チルドレン」⁷⁾による説明のように、適応上の問題の原因をすべて（多くは客観的情報によって検証されない）子ども時代の家庭環境に求めて、適応障害と関係があるかもしれない現在の状況要因の分析をおろそかにしてしまうようなことは、パースペクティブ拡張のバランスが崩れた例だといえるかもしれない。それでも、これまでの心理学者が適応障害を本人の性格や「心性」「無意識の葛藤」などなどの心的概念のせいにして、すべて問題を抱えた本人の中に放り込んでしまっていたのに比べれば、すこしはマシなのかもしれないが。

いずれにしても、心理学的観察のパースペクティブが実際には状況的・時間的にも非常に限定されており、それを基盤に内的説明を行なうことは、観察できない／観察されない状況要因をなかば意図的に無視することになるという事実は、いくら強調しても強調しすぎることは

ない。とくに、アセスメントや心理テスト、構造化面接などの心理学的「ツール」による情報は、ややもするとそれらの状況的・時間的限定性を全く考慮せずに利用され、一人歩きする危険性が大きく、実際には状況要因の力で変化するような個人差を、固定的で変容不可能なものとして決めつけて考える偏りにつながる。

個人差は決して固定的なものではなく、時間の経過や状況の変化に応じて変化していくものだし、状況要因を適切に統制することができれば、よりよく本人の希望にあったものに主体的に変えていくことも可能である⁸⁾。そして、こうした楽観的な展望は、安易な内的説明に頼らず、観察のパースペクティブを可能なかぎり広げていく心理学者の営みからもたらされるのである。

注

- 1) 渡邊芳之：心理学における構成概念と説明。北海道医療大学看護福祉学部紀要 ;2:81-86,1995
- 2) 渡邊芳之：メタファーとしての「こころ」～心的概念が意味しているもの。北海道医療大学看護福祉学部 紀要 ;4:75-82,1997
- 3) 渡邊芳之：性格にこだわる心。菊池聡，木下孝司編：不思議現象～子どもの心と教育；北大路書房；61- 82, 1997
- 4) 渡邊芳之，佐藤達哉：一貫性論争における行動の観察と予測の問題。性格心理学研究 ;2:68-81, 1994
- 5) 渡邊芳之，佐藤達哉：パーソナリティの一貫性をめぐる視点と時間の問題。心理学評論 ;36:226-243,1994
- 6) 渡邊芳之：性格の一貫性。詫摩武俊監修：性格心理学ハンドブック；福村出版；172-179, 1998
- 7) 信田さよ子：「アダルトチルドレン」完全理解。山五館，1996
- 8) 渡邊芳之，佐藤達哉：性格は変わる，変えられる。自由国民社；1996

Situational and chronological perspectives of observation; Their influences on psychological explanations of individual differences

Yoshiyuki Watanabe *

Abstract: When we select internal (mental) or external (situational) factors to explain individual differences we observe in human behaviour, our situational and chronological perspectives of observations have great influences on the selection. In general, the narrower the perspectives, the more often internal explanations are selected, neglecting many unobservable or unobserved situational factors. If the perspectives are situationally and/or chronologically broader, more situational factors are taken into account, then more often external explanations are selected. Implications of these findings on psychological explanations and assessments are discussed.

Key words: psychological explanations, observations, mental concepts

* Department of Psychology